



福岡市都市景観アドバイザー
岡道也氏

博多湾は、福岡市の都市環境の魅力を高めるうえで極めて重要な役割を占めている。特にこの10年ほどの間には、水辺に対する市民の関心も急速に高まり、博多湾沿岸での意欲的な水辺空間整備事業も進んだ。都心部ふ頭地区の「ベイサイドプレイス」や西部埋立地区での「シーサイドもちち」は、全国的にも注目された開発事例であり、ここでの動きは福岡市の魅力ある都市景観の創出に向けて新しい風を吹き込んできた。

ところがこれらのウオーターフロント開発地区では、このところ一時の元気がない。訪れる人も減少気味で、集客施設は経営的にも苦戦していると聞く。その原因はどこにあるのか。

これまで水辺の特定のスポットでの活性化と表情づくりにはがんばってきた。世間が「ウオーターフロント・ブーム」に浮かれています。間はそれでもよかったです。しかし、いったんそのブームも下火になると、水辺と既存市街地の連携を深めるなど、水辺開発の効果を高めるためには、より大きな枠組みでの条件整備が必要になった。その面での対応策の遅れが、水辺に対する人々

の関心を減退させていった大きな要因のひとつといえよう。

水辺と既存市街地を結ぶには、両者をつなぐ部分での土地利用の活性化、まちなみ景観の連続性確保、移動手段の利便性の拡大、水辺に行きたくなくなるような動機づけや雰囲気づくりの演出等々多くの課題がある。そして、それらへの取り組みは、実は市街地の構造をいかに変革していくかといった問題でもある。

福岡市が、博多湾をとりこんだ形で都市の魅力高めようとするのであれば、個別的な「水辺の整備」を繰り返すだけではなく、水辺と既存市街地が一体化した、いわば「水辺をもつ都市」としての総合的な都市デザインが必要である。そのことをあらためて強調しておきたい。

先般、久しぶりに北欧諸国を訪れ、何のてらいもなく、ごく自然に水辺が都市空間に包み込まれている姿を見て、バブル期に展開した我が国の「ウオーターフロント開発」の内容を、この際しつかり腰を落して見直すことが必要であると痛感した。



福岡市都市景観アドバイザー
松下美紀氏

どんなに小さなまちにも大都市にち、そこへの出入り口がある。明らかに目的のまちに着いたと感じる場面がそうである。福岡市はそのひとつが海である。船で能古島と志賀島の間から博多湾に入り、ふだんと違う目線でまちが広がり、大きな海の玄関としての役割を果たしていることがわかる。

私が思う成熟した海の夜景は、自分の艇を持ち、気軽に湾内を漂い、海からまちを眺める人が多いこと、そして逆に個人の艇がこちらに明かりをともしている湾の風景をまちから眺めるといふ二つの風景があることだ。光と水はとて相性が良い。まちの明かりが海に映り込み、風や空気濃度の違いなどで多様な表情を見せるからである。「まちの明かりがとてキレイね、横浜……」と歌われたのは昭和40年代。その頃から横浜も神戸もそして長崎も港町の夜景はきれいだと誰もが思っている。実際に、輝く光が海に反射して美しいし、港を行き交う船の明かりも温かい。博多湾も、ようやくサンセットクルーズの船が、夜間イルミネーションをつけてクルージングするようになり、夜の雰囲気醸し出すよ



撮影：石井紀久

うになつてはきたが、まだまだ寂しいものである。今までのまちづくりが北側の海を向けていたことが大きな原因だろうが、夜は特に寂しかった。そんななか、昨年3月に10周年を迎えて照明改善が行われた福岡タワーは、以前は裏側扱いだった北側を表に負けないような正面扱いの照明デザインとし、海から見たときの福岡市のランドマークを指している。また夏の花火大会の日には、おびただしい数の船が海から花火を楽しんでる。このように市民が気軽に海上へ繰り出せる親しみのある海辺となるとともに、海の玄関から入って来られるお客様を、温かくお迎えするデザインがもつとつと必要なのである。